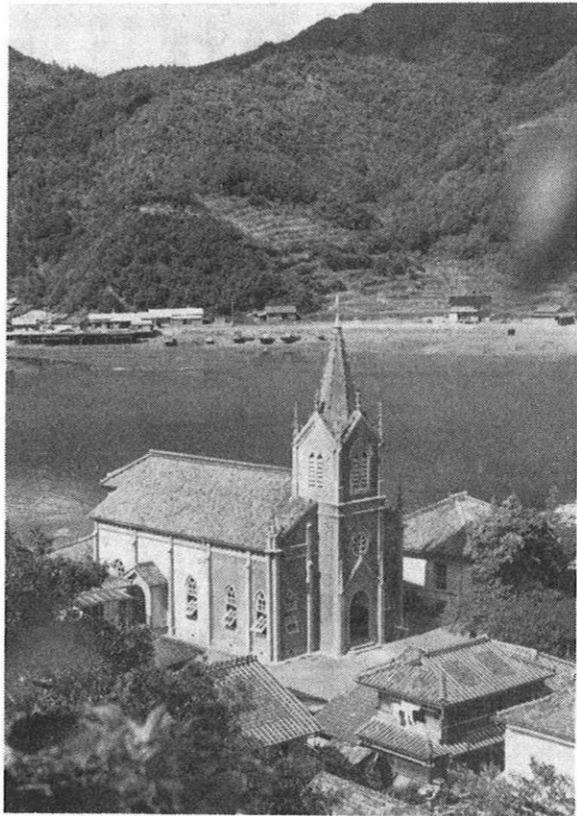


附近に玄武崎と烏帽子岩の奇勝があり、浴客の散歩に適している。

下田の温泉街を通り抜けると、ほどなく鬼海が浦の展望所につく。ここには、今年の四月、町営の国民宿舎「あまくさ荘」が完成し、下田から温泉も引かれてくる。この国民宿舎の特色は、すべての客室が海に面するように配置されていることであり、居ながらにして、天草灘の落日をほしのままにすることが出来る。

下田温泉から陶石の町高浜までは、車で一五分の距離である。その途中に、妙見が浦の展望所がある。鬼海が浦から妙見が浦まで、このあたりは、天草西海岸

崎津の天主堂と羊角湾.....



の中でもっともすぐれた景勝の地である。断崖と奇岩と打ち寄せる波濤、頼山の詩にも歌われた天草灘の美しさは、ここに極まる。

しかし、その美しくも厳しい自然条件の中から、からゆきさんの哀話も、また生まれてきたのである。人々はいま、路の辺に咲くカンナの花の眼にしみるような赤さに、異郷で散った貧しい女性たちをせつない望郷の想いを読み取ることが出来る。

最近、民間資本による開発がすすめられている十三仏崎の峠を越えると、高浜の町は、まったく忽然として、眼下にひらけて来る。高浜は純度の高い陶石の産

地として、江戸時代から有名な町である。現在も、わが国の陶磁器産業に欠くことのできない原料を供給している。しかし、はじめてここを訪れた人々の眼を、まず引き付けるのは、一、二〇〇坪に及ぶ白鶴浜の美しさである。

石英粗面岩の変質した良質の陶石の細粒がゆるやかに弧を描いて広がる浜辺に堆積し、樹令三〇〇年に及ぶ防潮林の松林が、その浜辺を、緑の色もあでやかに縁取っている。このような浜辺で、海水浴を楽しむたいと思わない者は、恐らく一人もいないだろう。松林にはキャンプ村も開設される。

高浜から隠れクリンタンの里大江を訪れるには、山越えの道をとらなければならぬ。かつて、新詩社の五人の詩人たちも、この山道を歩いて行った。現在は立派な県道が通じ、一〇数分で大江の里に至る。

隠れクリンタンの里

五人の青年詩人が、天草を訪れた最大の理由は、大江の天主堂に住む「ペアテルさん」、ルドビコ・ガルニエ神父を尋ねるのが目的であった。ガルニエ神父は、明治十八年、二五才のとき、故国のフランスを離れて日本に渡り、七年後の明治二十五年に大江にきた。野中の丘の上に立つ石造の天主堂は、ガルニエ神父が、私財を

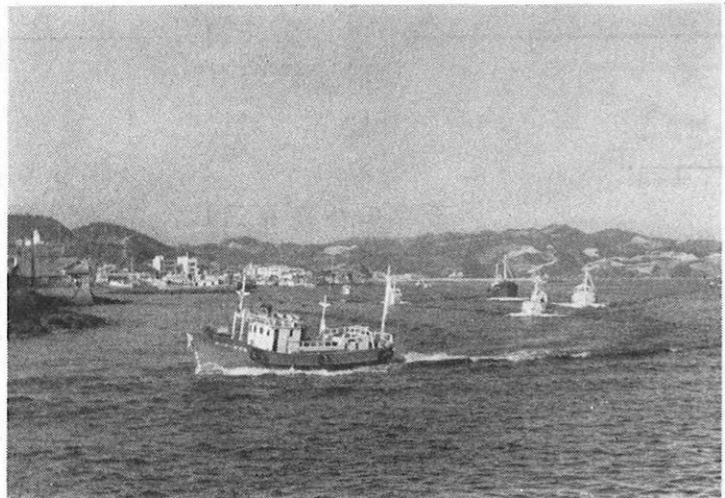


投じて建立したものである。その完成は、昭和七年のことであった。その後九年たつて、生涯を神への献身と伝道のために捧げたガルニエ神父は、八二才の高齢で、大江の里に没した。墓は、天主堂の裏手にある。天草における、隠れクリンタンの歴史は古い。すでに、島原の乱から一六〇年あまりの歳月が流れた文化元年、大江、崎津地方を中心に、五、二〇〇人にもものぼる隠れクリンタンが発見され、幕府の当局者を驚かせた。その後も、三〇〇年にわたる禁教と迫害の歴史を乗り越えて、隠れクリンタンは、天草島のへき地に信仰の灯を守り続け、明治六年に至り、明治政府の禁制廃止によって、ようやく世間の表面に出ることができた。五人の青年詩人は、ガルニエ神父のところで、昔の信徒が秘蔵したマリア像や、小型のメダル、ロザリオや十字架のたぐいを見せてもらい、また、クリンタンの歴史や信者たちの特異な風習など、いろいろな話を聞き、深い感銘を受けた。

＜牛深周辺＞



漁業基地牛深を足場に、鹿児島や、遠くは東支那海方面へも出漁している.....



クリンタンの遺跡をたずねての天草の旅は、五人の詩人たちに、強烈な印象を与え、やがて異国情緒にあふれるクリンタン文学として開花した。北原白秋は、天草の旅から帰ると、当時の詩壇を驚倒させた「天草雅歌」を発表し、白秋のクリンタン文学は、後に詩集「邪宗門」として集大成された。また、木下幸太郎は、旅行から帰った後、はじめて詩人として本格的な活躍をはじめ、「天草組」という一連の詩を発表した。また、二幕八場の戯曲「天草四郎」も、このときの旅の印象に胚胎している。白秋とともに泊りし天草の大江の宿は伴天連（はてれん）の宿大江の天主堂の横に立てられている歌碑には、吉井勇のこの歌が刻まれている。

崎津の天主堂

大江漁港は、羊角湾の湾口にある。青年詩人の一行は、ここから船に乗

って牛深に渡ったが、いまは羊角湾の海沿いに、舗装された道が通っている。この道が開通したのは昭和三十七年である。この道の完成によって、陸の孤島軍が浦は、陸路による交通ができるようになった。羊角湾は、羊の角のように、二つに分かれて深く陸地に嵌入している変化に富んだ入り江である。奥行きは一〇キロにも及ぶ。いたるところに奇岩巨石が佇立し、次々にあらわれては消える岬や断崖、静かな入り江に浮ぶ真珠養殖の筏を眺めながら、海岸づたいの道を行くと、やがて車は、崎津に至る。

崎津の町に近づくにつれて、青く澄んだ入り江の海と、緑の山を背景に、低い民家の屋根の上にくっきりとそびえ立つ天主堂の、ゴシック風の尖塔が見えてくる。崎津の天主堂は、明治十九年に木造で建てられたのが、その後、昭和九年に現在の位置に、石造で建て直されたものである。

南の玄関口牛深

崎津から、河浦町の中心一町田を経て、天草の南端牛深市までは、車で約一時間の距離である。

牛深市は人口三万人。ここは、鰯網漁業の基地として、明治四十年代から急速に発展した。また、現在牛深市および茶北町を中心に、出炭している天草無煙炭は、日本一の品質を誇る良質炭として、牛深の町に、近代的な活気を与えた。

市の中心にそびえる遠見山は、もと遠見番所があったところである。標高二一七尺、山頂に立つと、牛深市内はもとより、南天草の島々と、対岸の鹿児島県の長島、獅子島海域の多島海までが、手にとるように見渡される。遠見山には、現在、牛深市の手で登山道路が建設されており、山頂も園地化の計画がある。また、牛深港からは、水俣へのフェリーボートが発着しており、近く対岸の長島へも、フェリーボートが就航する予定である。牛深は、天草の南の玄関口として、いま着々と整備されており、ここから、南九州の霧島、桜島、開聞、日南海岸へのコースが、ひらけているのである。

10月の主な行事

- 健康保険全国勤労者陸上競技大会 (一日～二日)
- 「法の日」週間 (一日～七日)
- 全国労働衛生週間 (一日～七日)
- 食生活改善普及運動 (十月中)
- 里親および職親を求める運動 (十月中)
- 赤い羽根共同募金運動 (十月～十二月)
- 芸術祭 (十月～十一月)
- 体育の日 (十日)
- 秋の交通安全運動 (十一日～二十日)
- 精神衛生全国大会 (十二日～十四日)
- 鉄道記念日 (十四日)
- 薬と健康の週間 (十六日～二十二日)
- 国民体育大会秋季大会 (二十三日～二十八日)
- 原子力の日 (二十六日)